

# 伝達動力について

飯 島 周

## 要 旨

本小論は、いわゆるプラグ学派の機能的構文論 (FSP 理論) で中心的課題のひとつとなっている伝達動力 (CD) について、その意義と客観的定式化の試みを論ずるものである。すなわち、CD の理論的背景、特に3段階の言語構成分析によるアプローチ、CD の配分による文構成の説明、旧情報・新情報の2分法との比較、CD についての計算式の試論的設定、同計算式による実際の CD 計算例などを主要な内容とする。

0. この小論の目的は、自然言語の伝達様式に関する問題の一部を、機能的構文論の立場から考察することである。特に、この分析の中心概念である伝達動力について検討し、その客観的規定を試みる。分析の中心になるのは日本語であるが、必要に応じて他の言語、特に英語と比較し、言語的普遍性の問題にも若干触れる。

1. 分析の出発点で、まず明示すべきことは、言語活動における分野の区分である。Saussure (1916) によるラング (Langue) とパロール (Parole) の別以来、それらと関連する区分が必要であること、又はその区分が作業的に有効であることが、各方面で、たとえば服部 (1960) など、一般に認められている。いわゆる変形生成文法においても、この考え方は基本的に容認され、能力 (Competence) と運用 (Performance) の別が説かれた。実際の言語構成面では、深層構造と表面構造を代表とするさまざまな名称、概念が用いられており、複雑な様相を呈している。

しかし、このような言語構成レベルに関する論議には、ひとつの共通点がある。それは、名称や概念規定がどんなに相違していても、最低2段階のレベル、すなわち、抽象的な意味や論理のレベルと具体的な音形のレベルを区別することである。この区別だけは、言語学者の数だけ存在すると言われるほど多い言語理論の最大公約数とみなしてもよいであろう。

それに続く重要な問題は、この最低ふたつのレベル間の関係をどのように処理するか、ということである。完全に無関係なものとして取扱うことは、理論的にも実際的にも不可能である。しかし、レベルを混同して論ずることは、さらに混乱した状態を招くであろう。

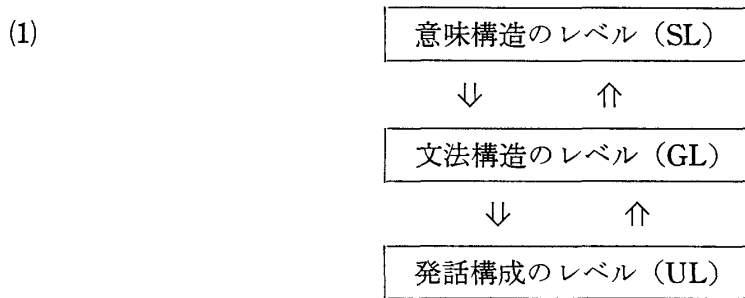
この点で、いわゆる機能言語学、特にプラグ学派の主流とみなされる考え方は、レベル間の処理について、比較的妥当な提案をしているように思われる。そこで、この派の代表的見解をまず検討する。

2. 言うまでもなく、この学派は V. Mathesius 以来の伝統を持ち、特に音韻論の面では、例の Saussure の考え方を発展させた有名な Trubetzkoy (1937) を代表とする多くの業績がある。他方、構文論についても先駆的な研究が多く、堅実な発展を見せている。とりわけ、機能的文構成 (Functional Sentence Perspective = FSP) に関しては、Mathesius (1929) 以来、すぐれた着想で大きな成果をあげている。この細部については後に述べる。

もちろん、この学派に属するすべての研究者の意見が一致しているわけではないが、FSP の分野での代表者としては、F. Daneš と J. Firbas があげられるであろう。両者とも数多くの労作を公表し、活発な研究活動で注目されている。

3. Daneš と Firbas の間にも、多少見解の相違が見られるが、Firbas (1974) および飯島 (1975 b) に述べられるように、言語構成のレベルを3段階に区別するという点では一致している。すなわち、(i)意味構造；(ii)文法構造；(iii)発話構成 の3レベルである。各レベルは、いずれもいわば水平面をなすが、もちろん垂直面での連絡もあり、Daneš (1964) によって図式化すれば、(1)のようになる。

この3段階によるアプローチを、具体的な文の分析に適用すれば、標準的には、たとえば(2)に示されるような形式になるであろう。各レベルを構成する要素は、それぞれのレベル独自の基準で決定される。各要素を示す用語は、慣用的なものを主体としているが、筆者による修正が一部に加えられている。なお、Halliday (1974) および柴谷 (1978) にも、同様な分析がある。



(2) *They read books.*

SL……行為者 (Ag)——行為 (Ac)——行為の対象 (G)

GL……主語 (S)——定動詞 (V)——目的語 (O)

UL……テーマ (T)——メディウム (M)——レーマ (R)

(2)の場合，垂直面をたどれば，Ag—S—T；Ac—V—M；G—O—R となるが，これらの関係はもちろん同一レベルの固定的なものではない。すなわち，強勢の転位，語順の変更などによって容易に移動する。従って，レベルの差を考えれば，一般に  $Ag \neq S \neq T$ ； $Ac \neq V \neq M$ ； $G \neq O \neq R$  と標示できる。機能的分析は，この垂直面の問題を十分に考慮すべきである。もちろん，この関係は，伝統的な方法でも考慮されているが，特に重点を置いた考え方は，いわゆる成層文法であろう。そして，成層文法とプラグ学派の類似点が時に指摘される。

ただ注意を要するのは，この3レベル間の各要素の対応関係を，必然的固定的と考える傾向が存在することである。たとえば，Ag は常にSでありTでなければならぬ，とする先入主であり，これに無意識に影響されている場合がある。従って，各種の文法に見られるレベルの混同の一因は，この先入主が一因となっていると言えよう。英文法においては，この傾向が特に顕著なようである。この論議については，たとえば Firbas (1966) を参照されたい。

4. 上記3レベルの中，従来最も詳しく研究されて来たのは GL であろう。このレベルが，Saussure の述べたラング，Chomsky の言う能力と最も密接な関係があることは，ほとんど疑う余地がない。なぜなら，SL は哲学的論理的要素が多く，あまりにも抽象的であり過ぎ，<sup>①</sup> 逆に UL は実際的色彩が強過ぎて，一種の応用科学の対象として扱われる可能性が大きいからである。

従って，言語学は独立した科学であると主張する立場では，GL のみがラング，すなわち真正の言語学の研究対象であると考え，SL と UL は二義的に扱うべきだとする意見が有力らしい。そのため，言語学的に言えば，UL はラングではなくパロールに属すると判断されることが多かった。もっとも，この点についても多種多様な意見があり，変形生成文法提唱者の一部では，ラングにあたる能力とパロールにあたる運用との区別を，初期に比べると，それ程明確にしない傾向も見えている。

いずれにせよ，研究が進むにつれ，特に機能的構文論の発展とともに，UL もラングに組入れること，つまり言語学の一義的な対象とすることが提案され，一部では実行されつつある。少なくとも，ラングと呼ばれるものが“言語活動における諸事実の規範”(Norme des faits de langage) であるならば，UL の研究がその規範の究明に差しかかっていることは事実である。従

って、以下はラングに関する論議と考えてよい。

5. 前述の FSP 理論は、UL の分析を中心課題としている。同理論は、Mathesius (1929) および (1939) によって導入された“文の実勢的分割”(aktuální členění věty)<sup>②</sup> という用語および概念に始まる。この用語の背景には、機能言語学があり、“形式から機能へ”という従来の分析方向を排し、“機能から形式へ”という主張が強くなされている。実際に、この用語は、Mathesius 自身による独訳形 Satzperspektive が示すように、文法的規準によるよりは心理的遠近法による文の構成を意味すると考えられた。さらに、その英訳形である Sentence Perspective に、Firbas が Functional という形容詞を追加して、視点を明確にしたのである。従って、通算すれば50年ほどの歴史を持ち、分析方法の体系化も進んでいる。この理論の全体的な展望については Daneš (1974) を参照されたい。

6. Mathesius の UL 分析は、主として、いわゆる旧(既知)情報と新(未知)情報の配列による2分法であった。ただし、初期においては、この両者を、それぞれ叙述の“出発点”(východiště) および叙述の“核”(jádro) と呼び、意味的な配慮が強かった。すなわち、現在よく使用される“主題”(Topic) と“解説”(Comment) に近い意味である。ただし、これらの用語は、概念規定と同様ある程度差異があるので、十分注意する必要がある。最近の試みとしては、LIPOC (Language-independent preferred order of constituents)<sup>③</sup> なども提唱され、このような分析法の多様性が示される。

ここで問題となる UL の分析は、当然一定の前後関係、すなわち言語的又は非言語的に指定される文脈を考慮に入れなければならない。換言すれば、ひとつの文集、又は談話を背景もしくは対象にする分析である。従って、その文集に属する文と文を連結して行く要素の設定が必要となる。前述の旧情報、新情報などは、そのような連結のはたらきをすると考えてよいであろう。

しかし、旧情報、新情報という用語の定義は、あまり明確でない所がある。たとえば、井上(1979)によれば、次のような説明がなされている。

(3) 文には、話者が聞き手にも分っているものとして扱う情報(旧い情報)と、話者が聞き手に伝えようとする、聞き手には未知であると判断している情報(新しい情報)が含まれている。

この記述は、かなり省略された表現で、おそらく不十分であろう。もちろん、これは話者のみの視点を前提としたものであり、これだけでは客観的な判定が困難である。少なくとも、文を構成するすべての要素を、この定義により新と旧の二段階だけに分類することは、多分不可能と思われる。

7. Firbas は、旧情報と新情報の配列による説明に検討を加え、それとはことなる基準である伝達動力(Communicative Dynamism=CD)という要因による構成法を設定した。これは、話し手と聞き手との関係、情動的要因、音声的指定など、伝達の内容と方法を含めた総合的な考え方である。すなわち、CD とは、一般に伝達を押し進める力であり、言語的に構成されるそれぞれの場(標準的には文と呼ばれる単位)の各要素に配分される。CD による分析は、2分法ではなく多段階的であり、少なくとも3段階の要素によってその言語単位が構成されると考える。

この構成要素は、すべてその CD の量を基準として分類される。すなわち、ある言語単位（以下文とする）の中で、CD が最小の要素群はテーマ (Theme=T)；最大のものはレーマ (Rheme=R)<sup>④</sup>；中間的なものはトランジション (transition=t) である。ただし、この最後の要素 t については、飯島 (1974) で提案し、(2)で示したように、筆者の用語ではメディウム (Medium=M) と呼ぶことにする。この要素が、一種の媒体としての機能を持つと認められるからである。なお、Tは「主題」、Rは「解説」というような意味で時に用いられ、Tは旧情報、Rは新情報をそれぞれあらわす、などと説明される場合もあるので、注意を要する。Firbas (1964) は、旧情報と新情報の区別の有用性を認め、無視すべきでないことを主張してはいるが、Tと旧情報、Rと新情報との関係は、それぞれ完全に一致するものではない。なお、Tとされる要素群の中で、さらに CD が最小の要素は Theme proper, R の中で CD が最大のものは Rheme proper と呼ばれ、細分化が可能である。

要するに、Firbas の呼ぶ FSP とは、上述の3要素、すなわち T, M, R の配分による文構成を指す。そして、この3要素の順段階的配分、つまり UL における T—M—R という構成が、人間の心理と言語の線条性に最もよく適合したものとみなし、これを CD の基本的配分<sup>⑤</sup>と呼び、言語的普遍性のひとつではないかと想定する。

この基本的配分とは別に、各言語には、その言語にとっての標準的配分があると考えられる。この標準的配分は、その言語の SL および GL との葛藤により、決定される。たとえば、英語やチェコ語など、一般に印欧語の標準的配分は、基本的配分と一致する。すなわち T—M—R と考えられる。これは(2)の英語の例などで承認できるであろう。ただし、筆者の母語である日本語について言えば、その標準的配分は基本的配分と一致せず、飯島 (1974) および (1975 a) で示されたように、T—R—M であると仮定できる。この配分の型は、日本語における GL の標準的語順、つまり SOV 型と無関係ではないかも知れない。言いかえれば、T—R—M という構成が日本語独自のものとは断定できない。事実、SOV 型の言語は数多いし、歴史的にみれば、英語にも古くは定動詞後置文が多かったのである。

もちろん、このような基本的配分は理論的設定として有効であり、それと一致しない T—R—M 型が実存することは、逆に基本的配分の価値を裏付けることにもなる。なお、各言語における配分の傾向は、言語的に構成されるすべての場、たとえば句、文、文集合など各種にわたる可能性がある。その一部は飯島 (1977) で論じたが、ここでは詳細な論議は省略する。

8. 上述の如く、CD とは純粹に伝達上の立場からの基準である。従って、具体的な情況、すなわち言語的非言語的な文脈の影響下にあるので、この定式化は極めて困難であるが、ある程度客観化するために、ひとつの試案を提示したい。いくつかの条件を整理すれば、CD を数値で示すための基本的な枠組、すなわち CD の計算式が作れるであろう。ただし、以下の計算式によって示される CD は、聞き手に与える影響を中心としたもので、むしろ説明要求度とでも呼んだ方がよいのかも知れない。しかし、無用な独自性の主張は、用語的な混乱を招くおそれがあるので、あえて同じ用語のままにしておく。

まず、各要素の CD は、音声的に各種の強調 (E) によって示され得る。これには数多くの段階が存在するが、単純化のため、便宜上3段階とし、無強調 (E<sub>1</sub>)；半強調 (E<sub>2</sub>)；主強調 (E<sub>3</sub>) に区別する。

次に、CD の基本的配分および標準的配分の原理に従えば、その要素の配列上の位置 (L),

たとえば文中の位置がその CD と関係を持ち得る。これも便宜上3段階、たとえば文頭 (L<sub>1</sub>) ; 文中 (L<sub>2</sub>) ; 文末 (L<sub>3</sub>) に区別できる。

さらに、CD は聞き手の理解度に反比例すると仮定し、これについての話し手の判定 (U) を無解 (U<sub>1</sub>) ; 半解 (U<sub>2</sub>) ; 全解 (U<sub>3</sub>) の3段階に区別して関連させることができる。ただし、この判定は聞き手の実情とことなることも多いが、そのような場合は、話し手側と聞き手側の CD 計算値が変わって来る。すなわち T や R が一致しないことになる。これは、我々が日常的によく経験することであろう。

このようにして、上記の各要因を設定し、それを総合すれば、基本となるべき CD の計算式、すなわち(4)が可能になる。

$$(4) \quad CD = \frac{E + L}{U} \quad \left( \begin{array}{l} \text{実際には } E_n ; L_n ; U_n \\ n = 1, 2, 3 \end{array} \right)$$

ここで具体的に数値を与え、E<sub>1</sub> = 1 ; E<sub>2</sub> = 2 ; E<sub>3</sub> = 3 ; L<sub>1</sub> = 1 ; L<sub>2</sub> = 2 ; L<sub>3</sub> = 3 ; U<sub>1</sub> = 1 ; U<sub>2</sub> = 2 ; U<sub>3</sub> = 3 として計算すれば、CD の範囲は(5)で示される。ただし、その文が文字化されている場合は、E の値が明示されないで、ここに多少の難点がある。

$$(5) \quad \frac{2}{3} \leq CD \leq 6$$

これに従い、たとえば(2)の各要素につき、文全体が音声的に無標であるとして、つまり英語の文の音声的構成の一般原則により、文末の要素 *books* に主強調があるとみなし、U をすべて 3 として計算すれば、次の結果が得られる。

$$(6) \quad \begin{array}{l} \text{a. } \textit{They} \text{ の } CD = \frac{1+1}{3} = \frac{2}{3} \dots\dots T \\ \text{b. } \textit{read} \text{ の } CD = \frac{2+2}{3} = \frac{4}{3} \dots\dots M \\ \text{c. } \textit{books} \text{ の } CD = \frac{3+3}{3} = \frac{6}{3} \dots\dots R \end{array}$$

すなわち、(6) a. b. c. の各計算値から比例的に T (*they*) = 2 ; M (*read*) = 4 ; R (*books*) = 6 という結果が得られ、根本的条件である T < M < R の原則と合致すると認めることができる。

もちろん、前述の如く、CD の標準的配分は言語によって差があるので、たとえば日本語の場合は、L に関してその数値の配分を修正しなければならない。すなわち、日本語の場合には、L<sub>1</sub> = 1 ; L<sub>2</sub> = 3 ; L<sub>3</sub> = 2 と変更すべきである。従って(2)と意味的にほぼ等しい日本文(7)の各要素の CD は、音声的に無標、つまり「本ヲ」に主強調がある場合、(8) a. b. c. で示される。

(7) カレラハ 本ヲ 読ム。

$$(8) \quad \begin{array}{l} \text{a. 「カレラハ」の } CD = \frac{1+1}{3} = \frac{2}{3} \dots\dots T \\ \text{b. 「本ヲ」の } CD = \frac{3+3}{3} = \frac{6}{3} \dots\dots R \\ \text{c. 「読ム」の } CD = \frac{2+2}{3} = \frac{4}{3} \dots\dots M \end{array}$$

この結果、T < R ; T < M ; M < R すなわち T < M < R という妥当な関係が示されることになる。

ただし、以上は極めて単純化した場合であって、実際には多くの補正的要因がある。たとえば、R指示語として、英語には *only* や *even* など、日本語には「タダ」「サエモ」などがあり、それらがある要素と併用される時には、その要素の CD を最大とすべきである。Rの指示は、そのほか統語法的にも可能である。たとえば英語の *It is..... that*~, 日本語の「～ノハ……ダ」など。

又、各要素の本来的な CD の差も考慮すべきであろう。その差は、主として GL における文法性と関連し、いわゆる品詞によって示される可能性がある。たとえば、代名詞や前置詞は、既知の要素や要素間の関係を示すから、一般に CD は小さく、強調されることも少い。名詞や動詞の CD は、状況によってことなるが、未知の要素を導入する場合は特に大きくなる。ただし、動詞であっても、繫辞 (Copula) 的なものは CD が小さく、強勢が置かれるのは特別な場合である。副詞についても、時や場所を示す語句は、状況設定の役割を帯びれば CD が小さくなる。これらについては、CD 計算の際に修正値を用いる必要があり得る。

修正値は、前述の補正的要因のある場合、すなわち形態論的、統語法的に有標である場合にも必要と思われる。これらの修正値は、±1 程度で間に合うであろう。

9. CD に関する有標性の一例として、日本語の助詞「ハ」と「ガ」の関係を略述する。両者の関係については、従来各種の論議があるが、最近の例としては(9)で示される記述が目立つ。

(9) 「ハ」は旧情報をあらわし、「ガ」は新情報をあらわす。

この記述で説明できる現象はたしかに一般的であるが、より包括的には、飯島 (1977) に述べられた CD による区別の方が適当であろう。これは、概略(10)で表現される。

(10) 一般に「ハ」は T を標示し「ガ」は R を標示する。

たとえば、次の例を参照されたい。

- (11) a. カレハ 本ヲ 書ク。  
b. カレガ 本ヲ 書ク。

(11) a. の「カレハ」は旧情報であり、「本ヲ書ク」が新情報となることは問題ない。しかし (11) b. の場合、「カレ」は当然既知の要素であるから、「カレガ」の扱いが問題となろう。すなわち「ガ」は旧情報をも新情報化するはたらきを持つとせざるを得ない。従って(3)および類似の定義は、この点でも再検討を要する。もちろん、その定義次第で(9)はどのようにも適用できるが、客観性や明確度にやや欠けるおそれがある。

一方(10)によって説明すれば、次のように記述できる。(11) a. は、音声的に無標の場合、すなわち「本ヲ」に主強調がある場合、T—R—Mの構成になる。各要素の CD 計算値は、(12) a. b. c. で示されるであろう。

$$(12) \quad \begin{aligned} a. & \text{ 「カレハ」の CD} = \frac{1+1}{3} = \frac{2}{3} \cdots \cdots T \\ b. & \text{ 「本ヲ」の CD} = \frac{3+3}{3} = \frac{6}{3} \cdots \cdots R \\ c. & \text{ 「書ク」の CD} = \frac{2+2}{3} = \frac{4}{3} \cdots \cdots M \end{aligned}$$

又、(11) b. の場合は、「カレ」が既知の要素であっても、この分析法では問題なく、「ガ」が接

続することによってRとなる。実際に普通先頭の要素「カレガ」に主強調が置かれるであろう。以下、平均的な状態では「本ヲ」の部分が「書ク」よりも強調されるとみなせば、(11)b. の各要素の CD は(13)a. b. c. で示される。ただし、R 標示語「ガ」による修正値1を加える。

$$(13) \quad \begin{aligned} \text{a. 「カレガ」の CD} &= \frac{3+1}{3} + 1 = \frac{7}{3} \cdots \cdots R \\ \text{b. 「本ヲ」の CD} &= \frac{2+3}{3} = \frac{5}{3} \cdots \cdots M \\ \text{c. 「書ク」の CD} &= \frac{1+2}{3} = \frac{3}{3} \cdots \cdots T \end{aligned}$$

従って(11)b. の FSP はR—M—Tとなり、日本語の標準的 CD 配分とは一致しない有標の配分であると説明できる。なお、配分が有標になる場合は、大体修正値の加算が必要になるであろう。

その他、「ガ」を含むいくつかの表現、たとえば「ワガ<sup>・</sup>国」「オラガ<sup>・</sup>総理」「ワタシガ<sup>・</sup>棄テタ女」などにおいて「ガ」はいずれも先行する要素をその表現中のRとして標示する。この場合「ガ」の位置に「ノ」を置いた表現と対比すれば、語感上の差異が認められるであろう。一般に「ノ」の場合には、先行する要素をRとする機能はないと思われる。

さらに、有名な「象ハ鼻ガ長イ」という例文においても、CD の配分は有効な説明を提供する。すなわち、この文は日本語の FSP として典型的なものである。(私見によれば、この文意は近似的に「象ハ鼻」でもあらわし得るが、そうなった場合には「ボクハウナギ」と同型であり、T—R—MのMの省略となる。ただしこの問題は別の機会に譲る。) 例にならってこの文の各要素の CD を計算すれば、(14)a. b. c. となるであろう。

$$(14) \quad \begin{aligned} \text{a. 「象ハ」の CD} &= \frac{1+1}{3} = \frac{2}{3} \cdots \cdots T \\ \text{b. 「鼻ガ」の CD} &= \frac{3+3}{3} + 1 = \frac{9}{3} \cdots \cdots R \\ \text{c. 「長イ」の CD} &= \frac{2+2}{3} = \frac{4}{3} \cdots \cdots M \end{aligned}$$

ただし、時に聞かれるタイプとして「象ハ」に半強調を置く場合がある。これは、象という動物の与える印象の強さによるのかも知れない。

これらの点について補説すれば、旧情報・新情報の配列による説明が、いわば知的判断のみに頼るのに対し、CD の配分による分析は、情動的要因をも含み得ると言える。そして、日常的な言語活動は、知的な面ばかりではなく、むしろ情動的な面が多いことを考慮すべきであろう。

さらに、見逃し得ないのは、前述の如く、CD の配分による説明が多段階的な分析を可能にしている点である。この点に関しては、たとえば久野(1978)のように、二段階による説明を補足するため、重要度という用語を併用している例もある。久野によれば、より古い情報は重要度のより低い情報であり、より新しい情報はより重要な情報である。従って、新旧という用語にこだわらず、重要度という用語と概念で統一することが可能であろう。その場合、重要度と CD とは非常に近いものになる可能性がある。

#### 10. 最後に、FSP に対する GL および SL の影響を簡単に考察する。

一般に、抽象度が高く潜在的な SL は、GL を通過して UL で具体化され顕在化する。この



際、GL は一種のフィルターとして機能する。すなわち、構成要素の削除、追加等々がなされ、伝達に適した構成となって音声化される。すなわち、UL の実際の形式、つまり FSP は、GL のフィルター効果によって決定され得る。

この効果は、言語によってことなると考えられる。たとえば、英語では UL に対する GL の規制が比較的きびしいので、文の適格性、又は文法性の基準も明確度が高い。細目をあげれば、時制や数の一致、語順の固定などがある。その他屈折の多い言語は、全体的に GL の規制が強くと感じられる。これに対し、日本語の伝達では、GL の規制は英語に比して非常に少なく、極端な場合には単語を並列するだけでも十分な情報を伝えられる。たとえば「ボク ウナギ」など。

この差は、おそらく文脈又は状況への依存度によるものであろう。文脈依存度が大きければ表現は簡単になり、依存度が小さければ表現は複雑にならざるを得ない。UL では、すべての文が文脈に依存するが、文脈依存度と文法的完全度は反比例することになる。たとえば、文脈依存度が極度に大きい時には、英語でも *Wonderful!* のような一語文が出現する。ただし、各言語における GL のフィルター効果によって、UL で顕在化する要素がそれぞれ異質のものになる可能性はある。たとえば、(15)(16)(17)(18)の各問答を比較されたい。これらは、日本語、チェコ語、ドイツ語、英語において、それぞれ可能と思われるものである。

- (15) a. カレハ ドイツ語ガ デキルカ。  
b. デキル。
- (16) a. *On umí německy ?*  
b. *Umí.*
- (17) a. *Kann er Deutch ?*  
b. *Kánn Deutch.*
- (18) a. *Can he speak German ?*  
b. *He cán.*

(15b.) と(16b.) は、いずれも1語だけであるが、これで十分な伝達と考えられる。しかし、厳密には差があり、(16b.) は、その主語が3人称単数であることをも示している。(17b.) は、*Er kann* が標準的かも知れないが、*Kann* 自体すでに(16b.) に準ずる機能を持っている。(18b.) は *Can* だけでも間に合うであろうが、その場合は不完全感又は不適格感が非常に強いと思われる。その他細部にわたって差を指摘することが可能であるが、これらはすべて GL の影響と言えるであろうし、FSP がその影響を受けるのは当然である。

さらに、SL との直接的関連、すなわち意味的な面からの影響も考えなければならない。この影響は、一般に意外性という表現で示される。たとえば(19)における文末の要素は、本来Mとなるべきものであるが、その直前に置かれた要素との意味的關係、すなわち意外性の大きさによって R と認定され得る。実際、音声的にも、この要素に主強調が与えられるであろう。

- (19) カレラハ 本ヲ 食ウ。

試みに(19)の各要素の CD を計算すれば、次のようになる。

- (20) a. 「カレラハ」の  $CD = \frac{1+1}{3} = \frac{2}{3} \dots T$   
b. 「本ヲ」の  $CD = \frac{2+3}{3} = \frac{5}{3} \dots M$

$$c. \text{「食ウ」の CD} = \frac{3+2}{1} = 5 \dots\dots R$$

この意外性が、伝達を押し進める動力を高め、さらに聞き手からの質問を生むことは当然である。なお、この場合の CD は、文の内部の要素に関してだけでなく、文全体についても考えるべきであろう。つまり、その文と他の文との関係についても、同一文集合の内部での CD 配分で説明できるかも知れない。文全体の CD は、その文を構成する各要素の CD の総和で示される可能性がある。これは、いわゆるテキスト分析における一手段として考慮に入れてもよいであろう。しかし、さらに検討を要する問題である。

11. 以上、かなり複雑で我田引水的な点もあるが、CD による分析は、旧情報・新情報、主題と解説などの二分法よりも、さらに精密度の高い説明を可能にすると思われる。この小論で提案した CD の計算式も、さらに詳しく検討して適不適を決定しなければならない。そのためには、FSP 分析をより多角的に適用して、その成否を確認すべきであろう。

(注)

- ① 坂井 (1979) は、この論理面を中心にした日本語分析の一例であるが、実際面とやや遊離した感がある。
- ② 内容的に日本語であらわせば「現実的文要素配列」などが適当と思われる。なお、これは「形式的文要素配列」と対比されるものである。
- ③ Dik (1978) 参照。
- ④ Daneš (1975) その他によれば、Daneš の用語としての T と R は、Firbas のものとは意味的に差がある。
- ⑤ これは、井上 (1979) の“旧・新の原理”とは別である。旧情報は比較的 CD が小さく、新情報は比較的 CD が大きい、そのまま、Firbas の言う T と R になるわけではない。

本論中の参考文献

- Daneš, F. (1964) 'A Three-Level Approach to Syntax' *Travaux Linguistiques de Prague (TLP)* 1 pp. 245—240  
 ——— (ed.) (1974) *Papers on Functional Sentence Perspective* Academia Prague, Mouton the Hague
- Dik, S. C. (1978) *Functional Grammar* North—Holland Amsterdam
- Firbas, J. (1964) 'On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis' *TLP* 1 pp. 267—280  
 ——— (1966) 'Non—Thematic Subjects in Contemporary English' *TLP* 2 pp. 239—256  
 ——— (1974) 'Some Aspects of the Czechoslovak Approach to Problems of Functional Sentence Perspective' Daneš (1974) pp. 11—37
- Halliday, M. A. K. (1974) 'The Place of "Functional Sentence Perspective" in the System of Linguistic Description' Daneš (1974) pp. 43—53
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』岩波書店 東京
- 飯島 周 (1974) 「文要素の配列に関する一考察」跡見学園女子大学紀要 (紀要) No. 7 pp. 1—8  
 ——— (1975 a) 'The Basic Distribution of Communicative Dynamism in Japanese' 紀要 No. 8 pp. 1—8  
 ——— (1975 b) 「プラーグ学派の二、三の用語について」『言語』Vol. 4 No. 6 pp. 42—43

- (1977) 'A Note on the Rheme and Rhematization' 紀要 No. 10 pp. 1—10
- 井上和子 (1979) 「古い情報・新しい情報」『言語』Vol. 8 No. 10 pp. 22—34
- 久野 璋 (1978) 『談話の文法』大修館 東京
- Mathesius, V. (1929) 'Funkční lingvistika' *Sborník přednášek proslavených na prvému sjezdu čl. profesorů filosofie, filologie a historie* Praha pp. 118—130
- (1939) 'O tak zvaném aktuálním členění větném' *Slovo a slovesnost* 5. pp. 171—4
- 坂井秀寿 (1979) 『日本語の文法と論理』勁草書房 東京
- Saussure, F. d. (1916) *Cours de linguistique générale* (実際使用は Cinquième édition (1962) Payot Paris)
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析—生成文法の方法—』大修館 東京
- Trubetzkoy, N. S. (1937) *Grundzüge der Phonologie* *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 7 Prague